

《公開講座》

スポーツ実践のための身体論

——パラ・スポーツを参考に——

田 中 愛

〈概要〉今回の講座では、パラ・スポーツを参考にしながら、スポーツ実践のための身体論について考える。はじめに、スポーツに関わる身体論を体育・スポーツ哲学の分野から概観し、身体論や身体観に関するこれまでの議論を紹介する。次に、哲学的考察から導き出された「身」の概念（例えば市川浩、1993）について取り上げ、パラ・スポーツにおいて「身として生きる」とはどういうことかについて考える。これらの理論的検討を背景に、パラ・スポーツ、特に演者も一プレイヤーとしてプレーしているパラバレーボールの面白さについて触れ、最後に、パラリンピックレガシーとして、スポーツのユニバーサルデザインの発想と、その実践の一端を紹介する。

身体論と「身」の概念

身体は、当然のことながら体育学・スポーツ科学の領域における中心的な研究対象である。その大部分は、パフォーマンス向上のため、あるいは怪我・故障や病気の回復のための医学・自然科学的な関心に基づいた研究である。しかし、体育学の一領域である体育・スポーツ哲学の領域においては、哲学における身体論をベースとした議論も行われている。身体を教育するとはどういうことか、という身体教育の実践と不可分の関心である。その主なテーマは、「心と体はどんな関係にあるか?」「身体とは何を指す概念か?」「身とはどんな言葉か?」等である。

いわゆる心身二元論の発想は、人間を「心」と「身体」に分けて理解しようとする人間観であり、近代の医科学を大きく進歩させてきた、その基幹となる心身観であると言えよう。我々は体を対象化し、治療の対象として見ることによってはじめて解剖や外科的処置をすることができる。科学的に身体を見、科学的に扱い、評価することによって、多くの病気やケガが治療できるものとなってきたことは間違いない。

ところが、身体教育の領域においては、その心身二元的発想を乗り越えるべきだという論調が高まり、その乗り越えが教育目標に掲げられるようになった。例えば1998年に公示された文部科学省学習指導要領体育編では、目標の第1行目に「心と体を一体ととらえ」という文言が初めて付され、この目標は2017年の改定の際にも目標として据えられている。人類の発展に貢献してきたはずの心身二元的な人間観は、ここでは乗り越えられるべき見方とされているのである。

その背景を考えれば、心身二元的な人間観からは、次のような見方が生じる可能性がある、とい

うことが指摘できよう。例えば「(身体は)私の所有物だから私の自由に扱ってよい」という自由論的な発想や、「脳や心が(身体を)支配する」というような主-従の関係、「(身体とは)他者からどう見られているかの評価指標である」という見方であり、近年まさにこれらの人間観によって倫理的・教育的な問題が生じていることも事実であろう。このことを考えれば、この二元的発想を乗り越えようとする努力は、現代であるからこそ必要な努力であると言わざるを得ない。

一元的な見方として「身」の概念を提唱した一人に、哲学者市川浩がいる。彼の身体論は、人間の身体を「主体としての身体」／「客体としての身体」／「対他身体」の3つの側面から捉え、「精神」と「身体」という概念を、同一対象を異なる角度から捉えた概念として捉えなおす試みである。さらに、人間の全体的存在を一元的に捉える場合には、「身」という概念がふさわしいとする。すなわち「身は解剖学的構造をもった生理的身体であると同時に、文化や歴史をそのうちに沈殿させ、身の構造として構造化した文化的・歴史的身体にほかならない」(『身の構造』、p.58-61)という見方である。

「身として生きる」：パラ・スポーツの面白さ

パラ・スポーツの選手たちの競技への取り組みを見れば、「身として生きる」とはどういうことかがよく理解できるように思う。例えば義足を使う人の陸上競技では、義足はすでにアスリートの身体であり、その人の一部分になっている、というような例がすぐに思い浮かべられるだろう。

また、パラバレー (sitting volleyball、パラリンピック正式種目) のプレースタイルは、立って走り、跳ぶことができなくても、手をはじめとする他の部分が足に代わって足のはたらきをする。例えば、ゲームにおいて静から動へ切り替えが起こるのはサーブプレシーブ (レセプション) である。立って行うバレーボールの場合、手を前に出してボールを迎え入れる準備をするのだが、その時、足も重要な役割を担っている。すなわち、膝を曲げ、重心を前に保ち待つ姿勢を作る。その際一番気づきにくく重要なのは足の指である。足の指で床をつかんでバランスを取り、すぐに踏み出せるように支えている。パラバレーの練習やゲームを行う中で、このような足の「はたらき」を、手の指で行っていることに気づく。手のひらで体を支え、肘を曲げ、待つ姿勢を保ちながら手の指はしっかりと床をつかんでいつでも動き出せるように構えている。そして、これらのことを、ほとんど意識化することなく勝手に行ってしまうのである。

このことから、我々の「身」としてのあり方が再確認される。すなわち、「足はモノで、このような形をしているから足」なのではなく、「支える」、「つかむ」、「踏み出す」などの「はたらき」こそが足なのだ。

パラ・スポーツにおいて、このような例は数多く存在する。例えばゴールボールの選手は、目で見なくともコートを「見る」ことができ、聴き、触ることを体験の中心に据えることによって、ボールや仲間や相手がどこにいて、何をしようとしているのかがわかる。選手たちは決して物理的身体としてプレーしているのではなく、まさに「身」としてその人のすべてを賭けて競技している。そして、アスリートの身体は決してモノではない。アスリートの身体は決して「皆のモノ」でも「国のモノ」でもなく、いま、ここで全身全霊を賭けて競技しているアスリートその人なのである。

さらにこのことは、決してパラアスリートだけに言えることではない。当然オリンピックアスリートにも言えることであるし、それだけではなく、オリ・パラのどちらの選手でもない、一般のわれわれの身体にも当てはまることなのである。

スポーツのユニバーサルデザイン：いわゆる“パラリンピックレガシー”として

多くのパラ・スポーツは、健常者が「支援者」か「指導者」として参加する。このことが、いわゆる障害を持つ人のスポーツ的活動の発展に重要であることに間違いはない。これからのパラ・スポーツのあり方に必要なスタイルとしては、上記に加え、いわゆる健常者が同じコートに立って練習や試合をし、一つのチームを作るのではないだろうか。

近年、社会全体が「ユニバーサルデザイン」を意識した街づくり、都市づくりを進めている。その発想は、従前の「体の不自由な人に配慮する」「普通のものに手を加える」というものではなく、そもそも「普通」とは何かを問い直すところからスタートする必要性に迫られるという。このようなユニバーサルデザインの発想がスポーツ実践にも取り入れられるなら、それは東京パラリンピックが終わった後のスポーツ実践の方向性に新たな価値をもたらす、いわゆるレガシーと成り得るだろう。

参考文献

- 市川浩 (1992)『精神としての身体』 講談社学術文庫
- 市川浩 (1993)『〈身〉の構造 身体論を超えて』 講談社学術文庫
- 高橋明 (2004)『障害者とスポーツ』 岩波新書